

SPUS Worldview Map

Study and Practice of Useful Safety

行知萌芽（こうちぼうが）

Let Action awaken Knowing

行をして、知を芽生えさせる。SPUS の哲学の源泉。

影種（かげめ） → 揺味（ゆらじ） → 紀射（きざし）

Still Well → Live Shift → First Glow

静けさに潜む気配が揺れを生み、兆しとして立ち上がる三段階。

Risk Assessment / 6Rs

Retrieve → Reveal → Render → Relate → Range → Remark

潜むものをすくい、現し、立ち上げ、つなぎ、広げ、共有する

——危険の芽が「知」へと変わる六つの動き。

Risk Reduction / 6Ds

Mapping → Layering → Timing → Wiring → Proceeding → Matrix

空間・構造・時間・接続・工程・妥当性を整え、安全を実装する

——安全の形を世界に立ち上げる六つの構成。

RA Instructor 夢見凧（Yumemi Nagi）

リスクアセスメントの動きを読み取り、6Rs を現場に根づかせる象徴的指導者。

Exemplar

Visualizing Exemplars

6Rs と 6Ds の交点に生まれる「好事例」。

SPUS の知が初めて“形”として現れる場所。

Actual Feel Study / Real Practice Diagnosis / Paradigm Mark

危険の芽を身体で理解し、現場の揺れを読み、

好事例を文化として刻む SPUS の三本柱。

Little DEVISALs ensure Luck & Ease.

小さな工夫が、幸運と安心をもたらす。SPUS の流儀。

Elsewhy Archives

「何も起きていない理由」を記憶する器。

SPUS の知が静かに蓄積されていく場所。

SPUS® の他に類を見ない特筆すべき点

1. 哲学を起点に安全を再定義する唯一の組織 – Ideal 理念

SPUS® は「安全とは何か」を哲学レベルから問い直し、Useful Safety（有用安全）を中心概念として安全文化を再構築しています。

安全を『有用性』で捉える
人間の知性（よく聞き・よく考え・よく話す）を基礎態度とする
Craft Science（工房的科学）を安全に適用する

これら三点を同時に掲げる団体は国内外にほぼ存在しません。

SPUS® はさらに、行動が知を芽生えさせる『行知萌芽 ※1』の哲学を基盤に、現場から知が立ち上がる安全文化を築いています。

創作・試作・対話を通じて知を育てる『創造的思考 ※2』を実務に組み込み、工夫を価値とする工房的プロセスを体系化した点が特筆されます。

2. DEVISALS（ちょっとした工夫）を核に据える独自の метод論 – Model 戦略

SPUS® は、理念を現場に降ろすための戦略として、DEVISALS（ちょっとした工夫）の体系化を中心に据えています。

小さな工夫を『安全の源泉』とみなします
工夫そのものを価値として扱う
手順よりも「創造的な改善」を重視する

安全界で「工夫の体系化」を主軸に置く組織は他にありません。

3. 安全を『工房的プロセス』として扱う稀有なアプローチ – Style 流儀

SPUS® は安全を、作業台での創作・試作・対話によって生まれる工房的プロセスとして扱っています。

机上のリスクアセスメントではなく
現場の知恵と経験を素材に
実験的・創作的に安全をつくる

安全技術を「創造行為」として扱う立場は極めて独自です。

4. 対等な議論による『実務能力の鍛錬』を目的とする唯一の場 – Rule 原則

SPUS® の学びは教育ではなく、
経験者同士が対等に議論し、互いの実務能力を鍛える場です。

上下関係のない水平型コミュニティをつくる
各機械の特性に応じた共創的な安全づくりを行う
実務者の能力向上を最優先にする

研修・講義型が主流の安全界において、この構造は極めて珍しいものです。

5. 中小企業メーカーの競争力を安全から支える独自の使命 – Angle 視点

多くの安全団体が「規格適合」「監査」「大企業向け」であるのに対し、
SPUS® は『中小企業の競争力向上』を Angle（視点）として掲げています。

安全を『コスト』ではなく『競争力の源泉』と捉える
現場の工夫を企業価値に変換する
実務者の能力を企業の強みにする

この視点を持つ安全団体はほぼ存在しません。

6. 理念・戦略・流儀・原則・視点の五層構造を持つ安全文化体系

SPUS® は安全を
Ideal（理念）→ Model（戦略）→ Style（流儀）→ Rule（原則）→ Angle（視点）
という五つの層で構造化しています。

哲学	なぜ
戦略	どうやって
行動様式	どのように
原則	何を守るか
視点	どこを見るか

安全を『文化体系』として設計している団体は他に存在しません。

※ 1 『行知萌芽』は、『知行合一』と合わせて知の活用を最大化します。

※ 2 『創造的思考』は、『気づき』を活かして考えていくことです。

SPUS® – 全国の中小企業のための「使える安全」をつくる

SPUS 有用安全考房は、全国の中小企業が抱える「安全は難しい」「専門家がない」「時間も予算もない」といった現実的な課題に寄り添って、現場で本当に使える安全文化 = 『有用安全 Useful Safety 』を研究・実践する任意団体です。SPUS は Study and Practice of Useful Safety の頭文字からなる名称で、「学び」と「実践」を両輪とする『行知萌芽』の姿勢を大切にしています。

中小企業の現場では、危険の芽は『見えているようで見えていない』ことが多く、経験や勘に依存した判断が積み重なりがちです。SPUS は、こうした現場に静かに沈んでいる暗黙知を丁寧にすくい上げるために、独自の リスクアセスメント新手法『RA/6Rs』を開発しました。影種 (Still Well)、揺味 (Live Shift)、紀射 (First Glow) といった知の動きを捉え、危険の芽がどのように立ち上がるかを体系的に理解するための世界初のモデルです。

一方、安全機能を実際の機械に『形として実装する』ためには、形式知に基づく設計力が欠かせません。そこで SPUS は、空間・構造・時間・接続・流動・妥当性の六つの視点から安全機能を構築する リスクリダクション新手法『RR/6Ds』を整備しました。これは ISO 12100 をはじめとする国際規格の思想と整合しつつ、中小企業でも実践できるように再構成された実務的な設計体系です。

これらの手法を「机上の理論」で終わらせないために、SPUS はミニチュア機械モデルを使った『実感研修 Actual Feel Study』を提供しています。危険の芽がどのように揺れ、どのように兆しとして現れ、安全機能がどのように時間の中で成立するのかを、身体感覚として理解できる研修です。初心者から中級者まで、経験に依存せず“感じたことを学びに変える”ことができる場として、実務を志向する中小企業に適しています。

さらに SPUS は、優れた取り組みを行った企業を『実例標章 Exemplars』として紹介し、好事例を社会に広げる活動も行っています。どの企業が、どのような判断と工夫で安全を実現したのかを明らかにすることで、全国の中小企業が互いに学び合う文化を育てます。

SPUS は、理念・戦略・流儀・原則からなるガバナンス・コードを掲げ、透明性と誠実さを重視した運営を行っています。『安全性・生産性・経済性の三立』を実現し、使う人と作る人の双方が安心を享受できる社会をつくること。それが SPUS 有用安全考房に期待される役割であり、私たちが目指す未来です。

SPUS® 有用安全考房

<https://spus.jp/>